

成果報告書

慶應義塾大学 看護医療学部 4年 岩田華林

1. 発表した研究

タイトル: Patterns for Well-being in Life: Supporting Life Design Based on 4 Factors of Happiness

著者: Karin Iwata, Hinako Ando, Yuki Kawabe, Takashi Maeno, Takashi Iba

2. 学会名

- ・ Pattern Languages of Programs Conference 2018(以下 PLoP)
→<https://www.hillside.net/plop/2018/>
- ・ Portland Urban Architecture Research Lab 10 Year Conference(以下 PUARL)
→<https://blogs.uoregon.edu/puarl2018/>

3. 活動日程

期間: 2018年10月22日～2018年10月31日

場所: University of Oregon Portland 70 NW Couch St. Portland, OR 97209

4. 活動目的

本活動の目的はアメリカで開催される PLoP にて学会発表を行うことである。発表論文は、ファーストオーサーである「Patterns for Well-being in Life: Supporting Life Design Based on 4 Factors of Happiness」である。学会発表をすることでパターン・ランゲージの専門家から身近ではあるが捉えにくい”well-being”を扱ったパターンがどのように書いたらより伝わるのか、書き手と読み手の双方向からの意見を得ること、そして修士課程まで続く本研究のパターンの質向上を目的とする。

5. 活動内容及びフィードバック

本学会の発表は参加者が互いの論文に対して対話形式でフィードバックし合う「ライターズワークショップ」の形式または、論文指導者と話し合いながらパターンをよりよく仕上げていく「ライティング・グループ」の形式で行われる。本論文は学会の初日にライティング・グループで発表し、論文指導者からフィードバックをいただいた(図1)。そしてそれをもとに書き直し、次の日に「ライターズワークショップ」にて発表し、主にパターンの内容について議論された(図2)。

ライターズワークショップでは6人の参加者のうち日本人の研究者が3人、海外の研究者が3人だったため、日本語で作っていたパターンを最初に読み、論文に掲載した英語

版のパターンを読んでもらうという形で行われた。そのため、日本語で書いたパターンが英語でもしっかりと表現できているか、また英語を母国語としている研究者がパターンを読んだ際、どのように読み取り、解釈するのかを知ることができた。英語は英語独特の表現があったり、言い回しやポジティブな面があったりと、英訳するという感覚よりは一度英語は英語で書き直すということが大事なのだと学んだ。例えば”happiness”と使っていたところは一時的な感情を表すので”well-being”で統一したほうがいいのではないか、などの意見をいただいた。特にこの”well-being”に関するパターンは抽象度が高い内容なので、言葉一つ一つ丁寧に扱うことの大切さを書き手として今後も意識していきたいと思った。また、パターンの全体像をよりわかりやすくするために図を入れることや、ページ数の表記などの指摘があったことで、より読み手を意識した論文の構成に上げることができた。



(図 1)



(図 2)

6. 今後の展望

本学会でいただいたフィードバックをもとに、今後パターンの質を高いものに上げていくことが可能になると考える。特に、英語の細かい表現などは国際学会である本学会に参加したからこそ得られたものである。そのため日本語、英語相互に書き直しを重ね、よりよいパターンに上げていきたい。論文に関しては、本学会で得られた論文へのフィードバックをもとに修正して最終版を来年1月15日までに提出し、ACMに登録されることを目標とする。

7. 謝辞

今回、国際学会に参加し、たくさんの学びや気づき、そして他国の研究者との出会いを得ることができたのは慶應義塾大学湘南藤沢学会様の研究助成金制度によるご支援をいただいたからであり、心より感謝申し上げます。